

何薩之譯

著

# 民法論綱

卷一



五六本

東泉圖書館				
六冊	四六号	三架	一函	屬類

ナニニ

034485-001-1

1-46

民法論綱

ゼルミー・ベンサム/著

M9

BBL-1099





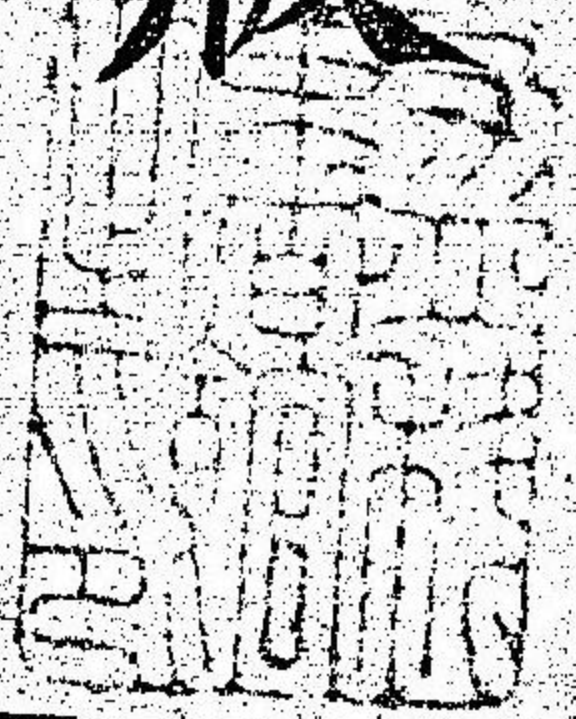
ゼーベヌサム著  
何禮之譯

何氏藏版

# 民法論綱

明治九年  
三月刻成

何氏藏版



## 緒言

原書ハ英國ノ政學家ゼルミール、ベンザム氏ノ遺  
集中「デプリンシプルス、オス、シナル、コード」ト題  
シ制法者ノ爲メニ專ラ人民ノ苦樂利害ヲ論辨  
セルモノナリ、因テ譯シテ民法論綱ト云フ  
氏ハ、一千七百四十八年ニ生レ、千八百三十二年  
ニ没セリ、享壽八十有四、壯年ニシテ、深ク法律ノ  
淵源ヲ究ム、當時ノ政刑未タ完備ノ域ニ達セサ  
ルヲ慷慨シ、之ヲ善美ヲ盡スヲ以テ畢生ノ事業  
トナシ、憲法、民法、刑法、訴訟法、政術、萬國公法ノ綱



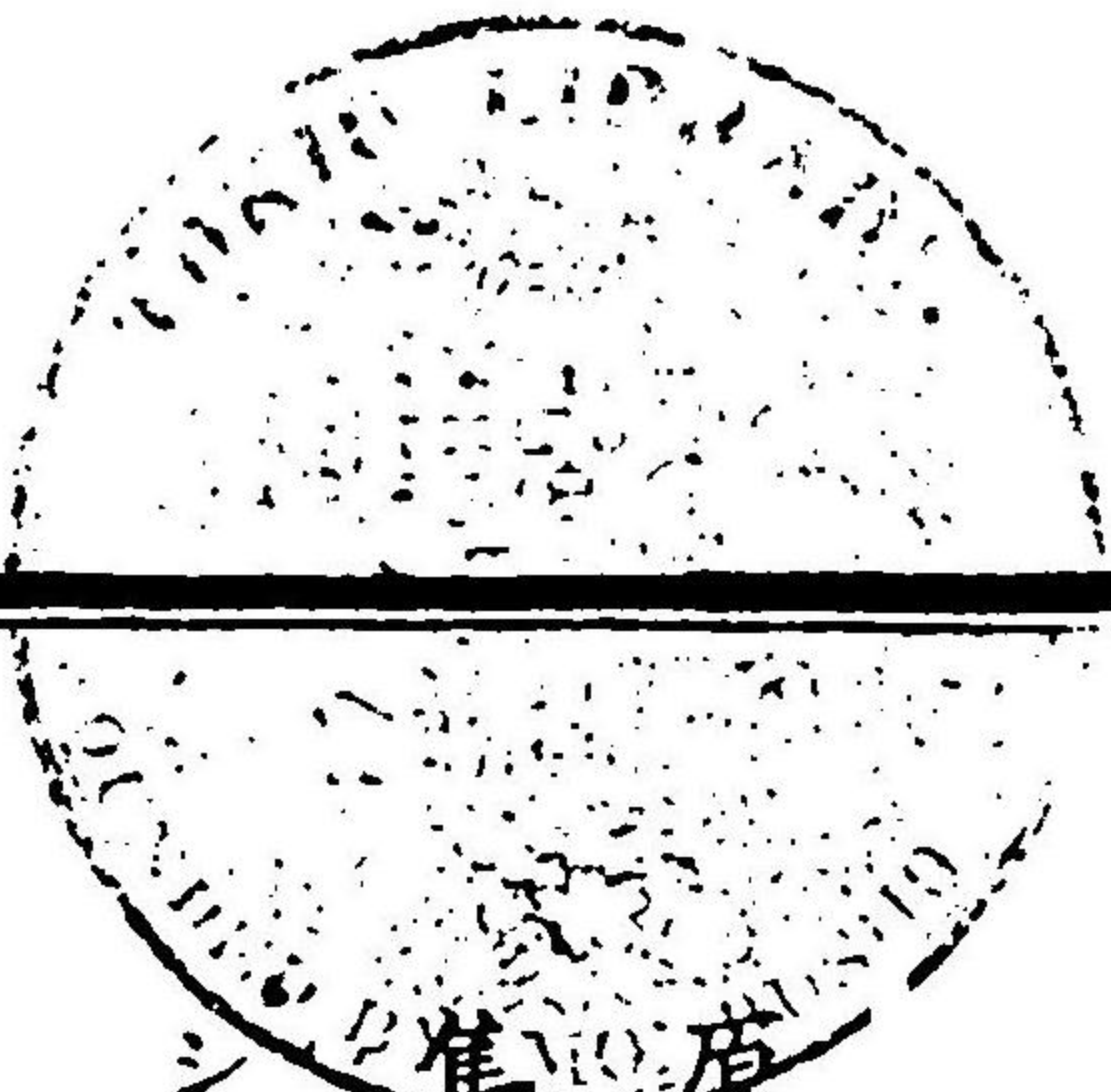
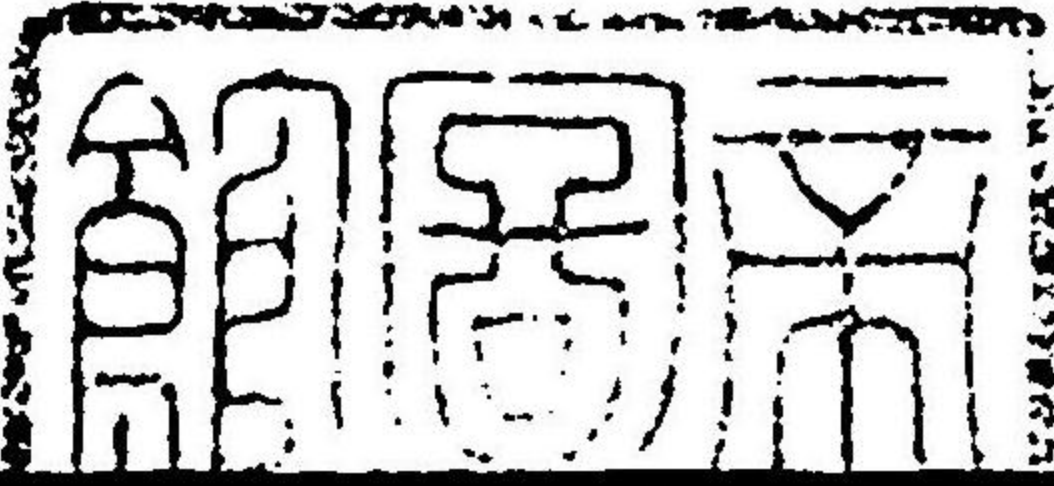
緒言

明治憲法論

原書ハ英國ノ政學家ゼルミル、ベンサム氏ノ遺  
集中「プリンシプルズ、オヴ、シヅル、コード」ト題  
シ制法者ノ爲メニ專ラ人民ノ苦樂利害ヲ論辨  
セルモノナリ、因テ譯シテ民法論綱ト云フ

氏ハ、一千七百四十八年ニ生レ、千八百三十二年  
没セリ、享壽八十有四、壯年ニシテ、深ク法律ノ  
淵源ヲ究ム、當時ノ政刑未タ完備ノ域ニ達セサ  
ラザリ、慷慨シ、之カ善美ヲ盡スヲ以テ、畢生ノ事業

トナシ、憲法、民法、刑法、訴訟法、政術、萬國公法ノ綱





理ヨリ、賦税、經濟、賞罰、教育、救貧、囚獄、藩屬地等ノ  
條目ニ至ル迄テ、深慮熟思シテ、其利害得失ヲ剖  
析シ、之ヲ修整改良セサル可ラサルヲ論述シテ  
前人未發ノ軌軸ヲ出シ、遂ニ其大名歐米ノ諸邦  
ニ喧傳セリ、凡ソ列邦ノ政廷ニ於テ、法制ニ關係  
スル事件アル片ハ、必ス氏ノ考案ヲ求メテ、典型  
ト爲スニ至レリ、其始メテ著述ニ從事セシヨリ  
筆ヲ擱ケルマテ五十年ノ春秋ヲ經過シ、捐館ノ  
時、ソノ稿本ノ多キ一車ニ餘リシト云フ、後其門  
生タル香港ノ鎮將ジヨン、ボウリング之ヲ纂輯

シテ全集十一冊ト爲シ以テ割刷ニ付セリ  
抑モ氏カ政學ノ壇上ニ於テ、不世出ノ稱ヲ得シ  
ハ、固ヨリソノ學識ノ談博ナル、論理ノ精微ナル  
ニ由リシト謂フト雖モ、カノ歐米諸邦ノ制法者  
ヲ感動シ、英國ノ民心ヲ作興シテ、當時ノ隆治ヲ  
致セシ所以ノモノハ、門生ノ功モ亦多キニ居ル、  
就中瑞西人ドユモントハ、一書稿ヲ脱スル毎ニ、  
之ヲ佛文ニ譯シテ、直チニ歐洲ノ大地ニ流傳セ  
シメ、ゼームス、ミル中村敬宇君カ譯セル自由之  
著主タル、夫ノ有名ナルスト理、林董君カ譯セル經濟書ノ  
ニカハルト、ミルノ父ナリサミユール、ロミリ



一 高名ナル法律學士ニシテ議官ニ擧ケ等能ク  
 テ、英國刑法誌、政體等ノ著述アリ 其學理論諦ヲ紹キテ、之ヲ擴充シ、遂ニ其理論ノ  
 果實ヲ、今日ノ政務上ニ結ハシムルニ由レリ  
 且其道義政務ノ事ヲ討論セル諸書ニ至テハ、常  
 ニ實利ノ大綱ヲ以テ、徹頭徹尾ノ主題ト爲シ、多  
 數ノ人民ヲシテ、多量ノ福利ヲ得セシムルノ一  
 句、即チ全體ノ命脈タリ、法制ヲ修整シ、政事ヲ改  
 革スルカ如キニ至テハ、議論銳烈ニシテ、頗ル急  
 進黨ノ氣象アリ、當時ニ於テハ、過激タルノ物議  
 ヲ免レザリシト雖モ、時運ノ開明ニ赴ムクニ從

テ其著述、遂ニ輿論ノ歸スル處トナリ、即チ今日  
 ノ濟貧法、地方ノ裁判廳、郵便法、商船律、節金豫備  
 ノ諸會社等ノ設置ノ如キ皆チ氏ノ賜ナリ  
 全集ノ論題、皆チ政事法律ニ係リ、其卷數固ヨリ  
 浩瀚ニシテ、盡ク之ヲ譯出センニハ、幾多ノ裊葛  
 ヲ換フモ容易ニ卒業シ難シ、故ニ先ツ現今ノ世  
 道人心ニ最モ切實適中スル者ヨリ著手シ、漸ク  
 完備ヲ期セント欲ス  
 書中所載ノ人名、地名、及官名、物名等ノ標柱ハ、都  
 テ萬法精理ノ譯例ニ從フ、且ツ字傍ニ圈點ヲ付



スルハ文中ノ主眼ナリ、讀者輕々看過ス可ラス

明治九年二月

譯者誌

民法論綱目次

上篇 民法ノ綱領

第一回 權利及義務之辨

第二回 民法ノ要目、即チ生計、殷實、全等、及安固

第三回 此四目、彼此相因ルノ理

第四回 營生ニ關涉スル法律

第五回 殷實ニ關涉スル法律

第六回 全等ノ利益ノ基ク處ノ理論

第七回 安固

第八回 資産



第九回 駁議ニ答フル辨解

第十回 資産ヲ侵スニ由テ所生ノ害ヲ解明ス

第十一回 安固及全等 其反動

第十二回 安固及全等 之ヲ協和スル術策

第十三回 安固ヲ得ルカ爲メニ安固ヲ放棄ス

ル

第十四回 議論ヲ生スヘキ論題

第一章 貧民救卹ノ事

第二章 宗教禮拜ノ費用

第三章 技藝學術ノ修養

第十五回 安固ヲ侵ス類例

第十六回 強促ノ交易

第十七回 法律ノ作用ノ希望心ヲ感動スル

中篇 資産ノ分配

第一回 資産所有法ノ一 總論

第二回 所有法ノ二 承諾

第三回 所有法ノ三 紹續

第四回 遺囑

第五回 服役ノ權利及之ヲ得ル方法

第六回 損失ヲ分配スル



下篇 私人ノ間ニ存スル權利義務

緒言

第一回 主從附 師弟

第二回 奴隸

第三回 後見人及幼者

第四回 親子

第五回 婚姻即チ夫婦ノ契約

民法論綱卷之一

何 禮之譯

編 民法ノ綱領

第一回 權利義務ノ辨

凡ハ制法者ノ職トシテ社會ノ人負ニ頒與マル處ノ  
 各事ハ之ヲ區別シテ權利ト義務トノ二類ト爲スヘ  
 シ  
 權利ハ自ラ利益タル、性アリテ之ヲ享クル人ノ便  
 宜ト爲ル、之ニ反シテ義務ハ職分ニシテ之ヲ有スル  
 人、爲メニ其負擔スヘキ責任ト爲ル



權利ト義務トハ素ト其性ヲ異ニシテ涇渭別アリト雖モ同一ノ泉源ニ出テ並ヒ行ハレテ並存シ決シテ相離ル能ハサルモノナリ、故ニ事物天然ノ理ニ從ヘハ法律ニ於テ一人ニ一定ノ便宜ヲ與フルニハ必ス同時ニ他ノ一人ニ一定ノ責任ヲ負擔セシメサル可ラス、約シテ之ヲ言ヘハ先ノ他ノ一人ニ相應ノ義務ヲ負擔セシメサルハ決シテ一人ノ爲メニ權利ヲ造爲スルヲ能ハサルナリ○然ラハ我ヲシテ地主タルノ權利ヲ得セシムルニ其法如何、曰ク我カ有スル所ノ土地物産ニ於テ他人ヲシテ敢テ觸手セサルノ義

務ヲ負ハシムル是レナリ、然ラハ我レニ主宰タルノ權利ヲ與ヘンニハ其法如何、曰ク或ハ一地方或ハ一社會ノ人ニ負擔セシムルニ我レニ服從スヘキノ義務ヲ以テスル是レナリ

制法者ハ唯權利ヲ人民ニ與フルヲ以テ其樂トス可クシテ、義務ヲ命スルヲ以テ其本旨ニ背クモノトス可シ、何トナレハ義務ノ性タル、カノ便宜ノ性アル權利ニ於テ損害タレハナリ、故ニ實利學ノ大綱ニ從フ片ハ制法者ノ人ニ義務ヲ負擔セシムルニ於テハ、必ス之ニ依リテ一層其價ノ大ナル便宜ヲ與ヘ得ルハ



目的アルニアラスンハ決シテ之ヲ吩咐ス可テサルナリ

權利アリテ義務ヲ生スルノ比例ハ、猶ホ法律アリテ自由權ヲ減削スルニ齊シ、唯々法律アルニ依リテ曾テ法律未制ノ前ニ在リテハ自由ト着做シテ咎メサリシ所ノ行爲モ變シテ罪犯ト爲ルカ故ニ、法律ニ於テ罪犯ヲ造ルニハ或ハ命シテ一定ノ事ヲ爲サシメ或ハ禁シテ一定ノ事ヲ爲サシメサルニ在リ夫レ自由權ヲ減削スルハ實ニ奈何トモス可テサルモノニシテ、制法者若シ自由權ノ幾分ヲ損失セサル

時ハ權利ヲ與ヘ義務ヲ命シ、人身、生命、榮譽、資産、生計ハ論ヲ俟タズ自由ノ本體ト雖モ之ヲ保護スルハ決シテ能ハサルナリ

然レモ自由權ノ區域内ニ設ケタル各個ノ制限〔此制限ノ良否ニ因テ起ルヘキ所ノ憂患疾苦ハ夥多ニシテ指ヲ屈スルニ餘リアル〕ハ姑ラク之ヲ論セスハ之ヲ負荷スルノ人民ニ在テハ多少ノ苦痛タルヲ免レサル可シ、是レ固ヨリ人情ノ然ラサルヲ得サル所ナリ、是故ニ若シ一定殊別ノ道理アリテ必ス満足スヘキ効果アルニアラスンハ決シテ制限ヲ立ツ可ラ

民法論綱 卷之一 二 何氏講稿



ス權威ヲ與ノ可ラス又壓制ノ法ヲ立ツ可ラス蓋シ  
 各個ノ壓制法アレハ必ス一個ノ道理アリテ始終之  
 ニ抗抵シ更ニ他ノ應援ヲ俟タスシテ也ヲ斡旋スル  
 ニ足ルヘシ何ヲカ一個ノ道理ト謂フ曰ク斯ノ如キ  
 法律ハ自由權ヲ束縛ス可シトノ一句是レナリ故ニ  
 壓制法ヲ設置セント欲スル時ハ制法者ハ先ツ其制  
 定セントスル法律ニ就テ一定殊別ノ道理アルヲ證  
 明スヘキハ論ヲ待タス又此一定殊別ノ道理ハ彼ノ  
 法律ニ抵抗スル處ノ普通ノ道理法律ハ自由權ヲ束縛スヘシノ一句  
 ヨリモ重且大ナルヲ啓示スヘキ預慮アルヲ要ス

各個ノ法律

束縛ヲ解キ或ハ禁令ヲ弛ムルカ如キ法律ヲ除ク

ハ自由權ト相

反スルモノナリト云フ題旨ハ自ラ明亮ニシテ毫モ

疑ヒヲ容ルヘキ所ナキカ如シ然ルニ世人舉テ之ヲ

認定スルヲ無シ當ニ認定セサルノミナラスカノ自

由權ニ熱心セル輩ト雖モ其心中激烈ノ氣却テ見識

ノ明ヲ掩ヒ此題旨ニ抗抵スルヲ以テ良心ノ許ス所

ト爲セリ此輩ノ云爲ヲ察スルニ此題旨ノ見解ヲ誤

リテ普通ノ意義ニ從ハスソノ所説ヲ聞ケハ自由權

ハ他人ヲ害セサル所ノ各事ヲ爲スノ權カヨリ成ル

トセリ斯ル見解ハ必竟根據ナキノ妄語ニシテ此語



ヲ以テ直ニ自由權普通ノ字義ト爲スニ在リ、然ラ  
 ハ則チ惡事ヲ爲スノ自由モ亦自由ニアラサルハナ  
 キヤ若シ之ヲ自由ニアラストセハ更ニ何物ヲ指シ  
 テ自由ト爲スヘキヤ、又自由ヲ説クニ果シテ何等ノ  
 語ヲ用ヒテ可ナリトスルヤ曾テ聞カスヤ、世ノ恆言  
 ニ痴呆邪惡ノ人ハ自由ヲ濫用セルニ依リテ之カ自  
 由ヲ剝ト去ル可シト謂フイヲ  
 果シテ此ノ見解ヲ眞實ナリトスルトキハ、我レ一ノ  
 行爲アエントスルニ預メ其結局ノ如何ヲ審察セス  
 シテ之ヲ爲シニハ、其之ヲ爲スノ自由アリヤ又ハ爲

サ、ルノ自由アリヤヲ知ルニ由シナカルヘシ、果シ  
 テ然ラハ我意ニ於テ他人ノ害タルヘシト認ムル時  
 ハ法律ノ許ス所ハ論ヲ俟タス假令ソノ命スル所ト  
 雖モ之ヲ爲スノ自由ナカラシ、譬ヘハ裁判官吏ノ盜  
 賊ヲ處スルニ方テモ其罰ハ盜賊ノ害タラサルヲ確  
 然保證スル上ニアラサレ、之ニ刑ヲ加フルノ自由  
 ナカル可シ、是レ此見解ノ妄謬ニシテ取ルニ足ラサ  
 ル所以ナリ  
 然ラハ妄謬ヲ脱レタル題旨ノ眞理ヲ講求セント欲  
 セハ其説如何



曰ク政府ノ專一ナル目的ハ能ク社會ノ多衆ヲシテ能ク多量ノ福利ヲ享ケシムルニ在ルヲ緊要ナリトス

而シテ一個人ノ福利ハソノ疾苦ノ輕且少ナルノ度數トソノ享得ノ重且大ナル度數ニ應シテ漸ク增長スルナリ

一個人ノ享得スヘキモノヲ供給スルノ謀慮ハ全ク之ヲ各人ニ委任シテ可ナリ、政府ノ義務ハ單ニ之ヲ保護シテソノ疾苦ヲシテ輕且少ナラシムルノ一點ニ止ルノミ

政府ハ權利ヲ造爲シテ之ヲ各人ニ頒與シ以テ能ク其職掌ニ負カサルモノトス、其權利トハ何ソヤ即チ人身ヲ保全スルノ權利ナリ名譽ヲ保護スルノ權利ナリ、緩急ノ時ニ方テ政府ノ扶助ヲ受ルノ權利ナリ

○既ニコノ諸權利ヲ與フレハ亦必ス之ニ相應スル諸ノ罪科ナカル可ラス何トナレハ法律ハ先ツ一定ノ義務ヲ造ルニアラサレハ一定ノ權利ヲ造ルヲ能ハス、罪科ヲ造ラサレハ權利ヲ造ル能ハス義務ヲ造ル能ハス、罪科ヲ造ルトハ一定ノ行爲ヲ化シテ罪科ニ罪科ノ名ヲ與各人ノ自由ヲ制限スルヲナクシテ

民法論綱 卷之一 五 何氏稿



ハ一ノ命令ヲ出ス能ハス一ノ禁制ヲ設クル能ハサ  
レハナリ 法律ニ於テ權利ヲ與フル片ハ此權利ヲ享  
行為アルモシテ妨礙シ或ハ之ニ抗抵スル處  
負ハシメサレハ能ハサルナリ  
是故ニ國民タル者ハソノ自由ノ一部ヲ捐スシテハ  
決シテ一ノ權利ヲ獲ル一能ハス○惡政ノ下ニ在リ  
ト雖モ所捐ノ者ト所獲ノ者トノ間ニ一定ノ比例ア  
ル一無シ唯所獲ノ度數益大ニシテ所捐ノ度數益少  
ナルニ從テ纔ニ完全ノ治ニ庶幾スルノミ

第二回 民法ノ要目

權利ト義務トヲ吩咐スルニ方テハ制法者ハ須ラク

國家ノ康福ヲ以テソノ目的ト爲スヲ要ス若シ能ク  
考究ノ力ヲ竭シテ審カニ此康福ハ何物ヨリ成ルヤ  
ノ測ルキハ則チ左ノ四件ノ節目ナルヲ看出スヘシ  
シユブジステンス  
按人ソノ性命ヲ扶持スルノ要  
需ナリ即チ生計或ハ爲生ノ道  
ト譯  
按性命ヲ扶持シテ餘リ有ルヲ  
云フ即チ餘資或ハ餘裕ハ財ト  
譯  
按素ト貴賤、貧富、苦樂等ノ均一  
ニシテ大差ナキヲ指ス、此書中  
ニテハ專ラ貧富ノ事ニ係ル  
ニ同等或ハ貧富無別ハ理ト譯  
ス

イクオリテイ  
アブندگان  
ス



セキユリテイ

〔譯〕安然ト事物ヲ保有シテ危懼  
スル所ナキヲ云フ、安固或ハ保  
全ト譯ス

此ノ四目ヲ享用スル一益、完全ナルニ從テ社會ノ康  
福ハ益繁昌ヲ致スナリ、カノ法律ニ依頼スル所ノ康  
福ニ於テハ殊ニ然ルモノナリトス  
蓋シ法律ノ作用ハ千態萬狀ナリト雖モ、概シテ之ヲ  
論スレハ爲生ノ道ヲ備ヘ殷富ノ實ヲ保テ、全等ノ理  
ニ親ミ、安固ノ事ヲ維持スルノ四事ニ止リテ、決シテ  
ソノ範圍ノ外ニアラサルヤ明白ナリ  
然レモ此四目ノ分界ヲ立テ各人ヲシテ、一目了然タ

ラシムルハ頗ル難事ニシテ記者カ筆頭亦其明蹟ヲ  
形容シ能ハサル所アリ、何トナレハ此點ニ於テハ彼  
此對峙ノ勢ヲ爲シテ其別ヲ認ムヘシト雖モ、彼點ニ  
於テハ大牙錯雜シテ鴻溝ノ所在ヲ定メ易カラサル  
ヲ以テ、唯々各個ノ節目ヲ執リ其含蓄スル所ヲ考究  
シ、始テ彼此ヲ混同スルノ患無ク、分界判然タルヲ得  
テ各人ヲシテ識得通曉セシム可キナリ  
譬ヘハ生計ハ自ラ殷實ノ中ニ存スルモノナレモ、法  
律ニテハ殷實ノ爲メニハ決シテ施行ス可ラサル事  
ヲモ生計ノ爲メニハ施行スルヲアリ、故ニ之ヲ別個



トシテ論スルモ固ヨリ理ニ於テ當然ノトトス  
安固ノ一目ハ之ニ乖戾スル處ノ行爲ノ種類ニ從テ  
其區別アリ、人身名譽、資産、及身代ニ關涉シタル安固  
是レナリ

法律ヲ以テ安固ヲ害スルノ行爲ヲ禁制スル時ハ、其  
行爲ハ乃チ罪犯ノ名目ト爲ル

此節目ノ中ニテ必ス未來ノ利害ニ注意セサルヲ得  
サルハ獨リ安固ノ一目ノミ然リトス、生計、殷實、全等  
ノ如キハ唯現時ノ利害ト看做シテ可ナリト雖モ、安  
固ニ至テハ則チ之ニ賴テ所得ノ利益ニ就キ多少ノ

間段ナカル可ラス、是レ安固ハ四目ノ中、最モ主要タ  
ル所以ナリ

全等ヲ以テ四目ニ列スルハ抑モ深意ノ在ルアリ、蓋  
シ各個ノ人民ニ能ク多量ノ康福ヲ享用セシムルノ  
趣意ヲ以テ制度典章ヲ設爲スルニ方テハ、其法律ニ  
於テ甲ニ厚ク乙ニ薄キカ如キ偏頗不平ノ理萬々之  
アル可ラス、嘗ニ偏頗不平ナカルヘキノミナラス更  
ニ之ヲ行フ可ラサル確理ノ存スルアリ、何トナレハ  
一人所得ノ利益ハ必ス之ニ應シタル損失ヲ他人ニ  
負ハシメタル結果ニシテ、其利ニ浴スルハ獨リ之ヲ



得シ所ノ一人ニ限リ、而ノソノ不利ハ之ヲ得サル所  
 ノ衆人ニ歸スルヲ以テナリ  
 全等ハソノ己ニ存立スル所ニ就テ之ヲ保護シ、ソノ  
 未タ存立セサル者ハ之ヲ發育セシメンカ爲メニ其  
 保護ノ法ヲ求ムヘシ、然レモ全等ヲ培養スルノ治術  
 ハ乃チ禍機ノ伏ス所ナルカ故ニ、若シ一着ヲ悞ル時  
 ハ忽チ國家ノ秩序ヲ顛覆シ人民ノ心志ヲ土崩スル  
 ニ至ルヘシ、慎マサル可ラス  
全等トハ法律ニ依テ所  
 生ノ諸ノ利益ヲ云フナ  
 リ、政權ニ就テ得ルモノヲ政權ノ全等ト云ヒ、民權ニ  
 就テ得ル者ヲ民權ノ全等ト云フ、書中單ニ全等ト稱  
 シテ別ニ冠語ナキモノハ資産  
 ノ厚薄ニ係ルモノト知ル可シ

此四目中ニ自由ノ一事ヲ掲ケサルハ大ニ讀者ノ怪  
 シム所ナルヘシ、然レモ自由ノ見解ヲ明瞭ニ會得ス  
 ルニハ、自由ヲ以テ安固ノ一部ト看做シテ之ヲ論ス  
 ル片ハ更ニ其肯綮ニ中ルヲ確實ナル可シ、何トナレ  
 ハ人身ノ自由トハ人身ノ諸害ヲ避クヘキ安固ナリ、  
 又政權上ノ自由トハ政府ノ鈎ヲ兼ル者ノ不正非義  
 ヲ蒙ラサル安固ニシテ、必竟此二者ハ何レモ安固ノ  
 一派タルニ過キス、是レ則チ自由四目中ニ列セサル  
 所以ナリ、而メ政權上ノ安固ニ至テハ民法ニ於ルヨ  
 リハ憲法ニ關係スルモノ居多ナルヲ以テ之ヲ憲法



論綱ニ詳論スヘシ

第三回 四目ニ彼此相因ルノ理アルヲ論ス  
 法律ノ四目ハ、心思上ニ於テハ判然ト其分界ヲ認ム  
 可シト雖モ、實際上ニ於テハ之ヲ定メ難シ、然ル所以  
 ノモノハ他ナシ、四目ナルモノ往々相聯合シテ全一  
 ノ法律ヲ以テ數目ヲ支配スルヲアレハナリ、例ヘハ  
 安固ノ爲メニ制定スル所ノ法律ハ、以テ齊シク之ヲ  
 生計殷實、爲メニ用フルモ妨ケ無キカ如シ  
 然リ而シテ、此數目又聯合協和シ能ハサルノ事情ア  
 ルカ故ニ、此一目ヲ支配セント欲シテ制定セシ所ノ

法律モ、他ノ一目ノ爲メニ障碍ト爲ルヲアリ、例ヘハ  
 全等ヲ致ス法律ニ至テハ貧富ヲ平均スルモノニテ、  
 決シテ安固ノ理ト並存スヘキモノニアラサルカ如  
 シ（我全等ヲ得ント欲セハ富ヲ削リテ貧ニ足サ、ル  
 可ラス、之ニ依テ富者ハ其資産ノ安固ヲ害セラル  
 云フ）  
 若シ此數目ノ中ニ反對スル所アリテ彼此相容レサ  
 ル時ハ、須ラク其輕重緩急ヲ計畫シテ之力取捨ヲ決  
 斷スルノ鑒識ナカル可カラス、此鑒識ヲ具ヘザレハ  
 徒ニ考究ノ方向ヲ悞ルノミナラス、喋々之ヲ論解ス  
 ルモ適以テソノ混亂ヲ増スニ過キス



蓋シ安固ノ事トカリセハ全等ノ理ハ一日モ世ニ存  
 ス可ラス、生計ノ道立タサレハ殷實ヲ得ルノ期ナカ  
 ル可シ

生計、安固ノ二目ハ本體ニシテ恰モ人ノ性命ニ齊シ  
 之、殷實全等ノ二者ハ之ヲ文飾スルノ物具ニ齊シ  
 故ニ生計、安固ノ二目ハ全時ニ萌芽ヲ發シテ同時ニ  
 成長シ、殷實同等ノ二目ハ此二者ニ隨行スヘキモノ  
 ナルヲ一見シテ其然ルヲ知ルヘキナリ  
 然リト雖モ、法律ヲ制定スルニ於テ最モ緊要ナル目  
 的ハ獨リ安固ノ一目ニ在リ、生計ノ如キハ敢テ直接

ノ法律ヲ設ケサルモ、一人トシテ之ヲ懈タル者ハア  
 ラス、若シ安固ニ就テ法律ヲ制定セサル時ハ、縱令、生  
 計ノ爲メニ法律ヲ制定スルトモ其効用ナキハ必然  
 ナリ、試ニ物産ヲ増殖セシムルノ法律、及ヒ農業ニ勤  
 勵セシムルノ法律ヲ制定ス可シ、唯此法律ノミニテ  
 ハ決シテ其効用アルヲ期シ難シ、然ルニ若シ安固ノ  
 法律ヲ制定シテ農者ヲ保護シ、其勞作ノ果實ヲ享用  
 セシメテ安全鞏固ナラシムル時ハ、唯此一目ノ法律  
 ニシテ其効用或ハ綽々餘裕アルニ至ラン  
 安固ノ緊要ナルコト已ニ此ノ如シ、而シテ安固ノ一



目ニハ尚ホ許多ノ枝派アリ、ソノ輕重ヲ酌量シテ之ヲ捨テ彼レヲ取ルノ方畧ナカル可ラス、故ニ自由權ハ安固ノ一枝派ナリト雖モ、全體ノ安固ニ抵觸スルカ如キ時ニ方テハ此自由權ヲ割カサル可ラス、蓋シ自由ノ幾分ヲ損セサレハ法律ヲ制定シ能ハサルカ故ナリ

夫レ小康ヲ棄テサレハ大福ヲ得ル能ハサルヤ斯ノ如シ、故ニ制法者ノ一法一律ヲ制定スルニ方テハ必ス此數目ノ中ニ就テソノ本末幹枝ヲ取捨セサル可ラス是レ最モ爲シ難キノ事業ニシテ政術ノ巧拙ノ

由テ見ル、所ナリ、蓋シ此數目ノ中ニテ這邊ニ於テ本幹タルモ那邊ニ於テハ末枝ト爲リ、自他互ニ更遞シテ一定セラルカ故ニ、之ヲ斟酌取捨スルニハ精微ノ籌算ヲ費サ、レハ得ヘカラサルヲ以テナリ將タ安固ヲ害セサル乎、將タ法律ニ依テ所生ノ希望心ヲ妨ケサル乎、或ハ現ニ定立セル資産ノ分配ヲ錯亂セサル乎、此三個ノ事情アルニアラサレハ決シテ貧富全等ノ理ヲ培養ス可ラス若シ果シテ一切ノ資産ヲ均分スルニ至ラハ未タ久シカラスシテ更ニ分ツヘキ物件ナキニ至ルヘシ、是



レ眼前ノ結果ニシテ數ノ最モ知リ易キモノナリ、洵  
トニ然ラハ社會ノ百事直ニ土崩瓦解ノ勢ヲ爲シ、而  
シテ此分配ニ依テ利益ヲ得ント欲セシ者モ、ソノ所  
得ノ害ハ却テカノ資産ヲ削ラレシ者ヨリモ尠カラ  
サル可久且ツ勤儉者ノ身代ヲ以テ懶惰者ノ身代ニ  
比シテ更ニ優劣無キニ至ルヘキヲ以テ、人々好テ逸  
ヲ去リ勞ニ就クモノアラサルハ必然ナリ  
若シ夫レ、人ハ皆同等ノ權利ヲ得ヘキモノトノ大綱  
ヲ立ル時ハ、已ム可ラサルノ事踵ヲ接シテ叢生シ、一  
切法律ヲ制定シ能ハサルハ必至ノ効果ナラハ益シ法

律ノ性タル、一人ニ權利ヲ與フルニハ必ス同時ニ他  
人ニ義務ヲ負シムルモノニテ、絶エス全等ノ理ヲ破  
毀スルモノナレハナリ  
試ニ人類皆同等ノ權利アルノ法律ヲ制定セヨ、忽チ  
尊卑ノ彙倫滅絶シテ、子タル者ハ其父ト同權ヲ得ル  
ニ至ラン、果シテ然ラハ子ニシテ父ニ命シ父ヲ罰シ  
父ノ家ヲ占領スルヲ猶ホ父ノ子ニ於ルカ如キモノ  
アラシ  
○瘋癲者ハ尋常ノ人ヲ禁錮監守シテ恰モ尋  
常ノ人カ瘋癲者ヲ禁錮監守スルニ同シカラシ  
○痴  
呆者ハ其家族ヲ支配シテ己カ家族ニ治メラル、カ



如キニ至ラン○此數事ハ都テ同權ノ範圍中ニ在ル  
 モノニテ之ヲ舉レハ一事モ同權ニアラサルハ無ク  
 之ヲ措ケハ又一事モ同權ニ關スルナシカノ同權ノ  
 理ヲ主張セシ諸家ト雖モ其人固ヨリ白痴ニアラス  
 豈敢テ如斯無限ノ同權ヲ設立スルノ趣意アランヤ  
 其意衷ヲ叩カハ必ス一定ノ制限一定ノ變通一定ノ  
 見解アリシハ疑團ヲ容レサル處ナリ然レモ之ヲ  
 主張スル諸家ニシテ通シ易キ明瞭ノ見解ヲ下ス  
 ヲ知ラス焉ノ能ク蠢爾タル億兆ニ指示シテ却テ諸  
 家ノ理會シ能ハサルモノヲ理會セシムルヲ望ムハ

ケンヤ若シ諸家ニ於テ不羈獨立ノ事ヲ制定セハ億  
 兆之ヲ聽テ從屬ノ大義ヲ破ラサルヲ欲スト雖モ決  
 シテ得ヘカラサルナリ

譯者曰ク佛國ノ革命ニ方リ人民起テ王室ヲ倒  
 シ民權ヲ伸張シテ爲メニ民權全等律ヲ制定セ  
 リ記者深ク其世道人心ニ害アルヲ憂テ佛國民  
 權論駁ノ著述アリ本文ノ意蓋シ之ヲ指スカ如シ

第四回 生計ニ關涉スル法律ヲ論ス

法律ハ生計ニ關涉シテ如何ナル作用アリヤ曰ク一  
 モ直接ノ作用ナシ生計ニ關涉シタル法律ノ作用ハ



單ニ生計ヲ慮ルノ念頭ヲ起サシムルニ止マルノミ  
約シテ之ヲ言ヘハ賞罰ノ理ヲ以テ人民ヲ鼓舞シテ  
自ラ生計ノ道ヲ求メシムルニ在リ然リ而シテ造物主  
人ニ賦スルニ自營ノ良能ヲ以テシ、ソノ氣力頗ル壯  
健ナルカ故ニ人ノ意中未タ法律ノ設之アラサルノ  
前ニ方テ己ニ物ヲ需メ物ヲ享クルノ念頭アリ、此念  
頭能ク人類ヲシテ致々懈ラサラシム、其功ハ迫カニ  
完備セル法律ニ優レリ、抑モ窮乏需要ノ一事ハ諸苦  
難ノ伏ス所ニシテ、甚シキハ死亡ヲ免レサルヲ以テ  
能ク人ノ勞作ヲ勵マシ、氣力ヲ淬キ、未來ノ慮ヲ起シ、

才能ヲ開發スルノ作用アリテ、福利ヲ享用スルヲハ  
即チ諸窮乏需用ヲ充足シタル良友ニシテ能ク艱難  
ニ抗抵耐忍シ、造化ノ工夫ヲ贊成シタル人ノ褒賞ニ  
屬ス、乃チ取テ竭キス汲テ涸レサル無盡藏ナリ  
良能上ノ氣力ノ強盛ナル斯ノ如シ、故ニ政治上ニ於  
テ生計ノ爲メニ人爲ノ法律ヲ制定スルハ徒ニ蛇足  
タルヲ免レス  
加之法律ニ刺衝セラレテ所發ノ念頭ハ、作用ノ際ニ  
於テ常ニ多少ノ動亂アルヲ免レス、然ル所以ノモノ  
ハ法律ノ性タル全璧無缺ノモノニアラサルト、賞罰



ヲ行フニ先ツテ必定ノ事實ヲ判決シ能ハザルトニ  
基キ且ツ法律ノ成果ヲ得ルニハ必スソノ經過路々  
ル中間ノ諸點ニ於テ各人倖免ヲ望ムノ情アリテ心  
肝ニ銘シテ消ヘサレハナリ然ルニ夫ノ良能ノ運爲  
即チ造化自然ノ賞罰ニ於テハ斯ル動亂アルヲ見ス  
唯實驗ニ因テ事情ヲ審カニシ實驗ニ因テ事情ヲ決  
定シ今日所執ノ課程ハ即チ昨日經過シタル課程ヲ  
溫復シテ始終ノ順序整然トシテ紊レス其間一點ノ  
疑惑ヲ容ル可ラス從テ倖免ヲ望ムモノ無ク怠慢ス  
ルモノ無ク特恩ヲ蒙ルモノ無シ夫レ良能ノ氣力斯

ノ如ク壯盛ニシテソノ作用斯ノ如ク間斷無シ然ル  
ニ尚ホ人爲ノ法律ヲ制定シテ以テ直接ニ之ヲ治ム  
ヘキヤ  
然リト雖モ特ニ法律ヲ制定スル所以ノ者ハ以テ其  
勞作スル際ニ方テハ其人ヲ保護シ且勞作ノ後ハ其  
所得ノ果實ヲ保護シテ間接ニ於テ生計ノ道ヲ備ヘ  
シムルニ在リ之ヲ勞作ノ果實ヲ保護安全ニスト謂  
フ此時ニ方リ人爲ノ法律ノ利益ハソノ深厚測ル可  
ラサルモノアリ

第五回 殷實ニ關涉スル法律ヲ論ス



各私人ヲシテ敢テ生計ノミニ為安セシメス、必ス又  
 殷實ノ計ヲ求メシムルノ法律ヲ制定スヘキヤ曰ク  
 良能ノ活機己ニ盛ンナルニ方テ、人為ノ法律ヲ施ス  
 ハ却テ其害アルモ其益ハナカルヘシ、抑モ人類ハ快  
 樂ニ誘ハレ或ハ窮乏ニ迫リテ康福ヲ増加スルノ熱  
 心アリ、苟モ安固ノ法律ヲ以テ之ヲ保護スル時ハ、新  
 ニ一物ヲ得ルニ從ヒ新ニ氣力ヲ發シテ更ニ其他ヲ  
 得ンコトヲ欲シ其情願斷ユルコトナシ且窮乏ノ福利ノ二  
 者ハ人間社會普通ノ幹事ニシテ嘉禾ノ穗始メテ登  
 レハ漸ク倉庫ヲ建シト欲シ、倉庫己ニ建テハ之ヲ増

シテ累々相滿タシメシコトヲ希望ス、此希望ノ情ハ之  
 ヲ饜足セシムルノ方便ニ從テ增長シ、吾人、一歩ヲ進  
 ムレハ眼界之ニ應シテ開擴シ、地位ノ進ムニ從テ新  
 ニ窮乏ヲ生シ、苦樂齊シク之ニ伴フテ以テ新ニ運爲  
 ノ大道ヲ指示ス、殊ニ富裕ナルモノハ彼此相對スル  
 ノ稱ニシテ固ヨリ定點ナキモノナルカ故ニ、一タヒ  
 富裕ノ域ニ達スルトモ進取ノ勢ハ止マルコト無ク、富  
 裕ノ實益大ナレハ運爲ノ區域益廣ク、其實ヲ得ルコ  
 益大ニシテ從テ進取ノ氣力ヲ鼓舞スルコト益熾ナリ、  
 是ヲ以テ一社會ノ富ハ、即チ此社會ヲ集成スル處ノ



各私人ノ富ヲ統合通算スルモノニシテ、各私人已ニ此良能ノ作用アリテ其氣力ハ以テ富ヲ増シテ極度ニ至ラシムルニ足ルナリ、然ルニ尚ホ何ノ更ニ人爲ノ法律ヲ要ス可ケンヤ  
蓋シ殷實ハ漸次ニ其果ヲ結ンテ即チ生計ヲ備フル所ノ原因ノ斷エサル運爲ニ出ルモノニシテ、此二目ノ間ニハ一點ノ牴牾アラサルト已ニ吾人ノ知ルトコロナリ、啻ニ二目ノ間ニハ牴牾ナキノミナラス、殷富ノ實益盛大ナレハ生計ノ道益安全ナリ、然ルニ殷實ニ奢侈ノ名ヲ下シテ之ヲ忌ミ憎ム者アリ此輩ハ

二目ノ脈絡相通シ彼此相因ルノ理アルヲ知ラサルモノナリ

夫レ人間社會ニハ凶歉、軍旅及ヒ各般ノ災害、相生シテ屢々生計ノ源ヲ侵撃シ、之カ爲メニ餘財無キノ社會ハ衣食ノ資ニ窮乏スルト亦甚シトセス、今日野蠻ノ人民及ヒ昔日我カ諸國ノ未タ富强ニ至ラサル時ノ境遇即チ是レナリ、又瑞典ノ如キ天時地利ニ貧シキ乎、或ハ政府ノ治圖貿易ノ運用ヲ保護スルトナク却テ之ヲ阻格スル邦土ニ於テハ、今日ニ在リテ尚ホ未タ此災害ニ罹ルヲ免レズ、之ニ及シテ今日英國ノ



景況ノ如キ、政治文明ニ趨キタル處ニ於テハ、貿易自由ニシテ奢用ノ物品ニ富ミ、其無用ノ玩物ヲ輸出シ以テ日需ノ要品ト交易スルヲ以テ、奢用物ノ製造局ハ自ラ窮乏ヲ防クヘキ保險場ト為リ、釀酒、造餅ノ材料ハ之ヲ化シテ生計ノ資ト為セリ、故ニ年登ラサルコトアルモ亦敢テ飢饉ヲ患フルノ虞アラサルナリ、○世人動モスレハ犬馬ヲ養フカ為メニ人ノ食物ヲ糜費スルヲ咎ムルモノアリ、蓋シ政事家ノ能ク思慮ニ富メルモノハ其智術ヲ以テ一朝斯ノ冗費ヲ省減シ得ヘシト雖モ、其施設若シ當ヲ失フコトアラハ、猶ホ彼

ノ偏固者流カ穀ノ多キヲ欲シテ火ヲ倉廩ニ放ツカ  
 如ク、必竟、國家ノ經濟ニ於テ利スル所ナキナリ（接反語ヲ以テ政事家ノ思慮淺近ナルヲ嘲弄スルモノ）

第六回 同等ナル利益ノ由テ基ク所ノ病理學

巴土魯及病理トハ醫術ノ學語ナリ、從來、此語ヲ道義パトロジーノ一ニ用ヒタル事ナシ、然レモ之ヲ茲ニ用ヒテ齊シク缺ク可ラサルモノアリ、抑モ今其學語ヲ爰ニ用フル所以ハ則チ人民ノ性情、愛憎及ヒ康福上ニ於テノノ効果ヲ通曉識得スルノ謂ニシテ、即チ道義上ノ病



理學タルヲ以テナリ、○制法ノ事タル從來、專ラ人ノ  
 血氣ト偏見トニ出テソノ基礎堅固ナラス、恰モ沙上  
 ニ在ル家屋ノ如ク爾リ、然レモ終ニ宜ク人情、經驗ノ  
 二者ヲ以テ其根柢ト為シ、更ニ動搖ノ患ナカラシメ、  
 加フルニ道義上、寒暑計ヲ用ヒテ以テ人民ノ苦樂  
 ヲ測リ、一度一秒ノ微ヲモ必ス指示シテ遺サ、ルヲ  
 要スルニ至ルヘシ、固ヨリ斯ノ如キ機器ヲ具有スル  
 ハ大聖人ニアラサレハ敢テ期ス可ラスト雖モ、制法  
 者ハ當ニ此ノ極點ニ達スルヲ希圖セサル可ラス○  
 夫レ備サニ人民ノ苦樂ヲ究メ知ルハ、其初ハ瑣碎

繁密ニ堪ヘサル事業ノ如キモノアリ、或ハ謂ハン人  
 事ヲ治ムルハ大體ヲ得ルニ在リ、事已ニ庶幾ノ度ニ  
 到ラハ則チ自ラ足りテ止マルヘシト、此言ヤ物ヲ處  
 スル甚タ親切ナラス或ハ懦弱ニシテ氣力ナキ者ノ  
 論ニ過キス○夫レ人情ハ頗ル端正ニシテ以テ一藝  
 一術ノ規矩タルニ足ルモノアリ、然レモ苟モ人情爰  
 ニ到ラサル間ハ、拮据鞅掌スルモ適マ方向ヲ悞リテ  
 進取ノ切ヲ奏セズ、醫術ハ氣形ノ病理學ニ淵源シ、道  
 義ハ即チ心魂ノ醫術ニシテ制法ノ事ハ之ヲ實際ニ  
 施スノ一科タリ、是故ニ制法ノ事ハ人智ノ病理學ニ



淵源セサル可ラス

富財ノ部分ノ康福上ニ於テ效果ヲ判定セント欲スルニハ、先ツ其境遇ヲ三等ニ分チ、各其異ナル處ニ就テ之ヲ論スヘシ

第一ノ境遇 常ニ富財ヲ有セシ時

第二ノ境遇 將ニ富財ヲ得ントスル時

第三ノ境遇 將ニ富財ヲ失ントスル時

總論 右ノ康福上ニ於ル效果ヲ論スルニハ、常ニ各人ノ心地ト其境遇ノ形迹トノ如何ニ拘ラサルモノト知ルヘシ、何トナレハ人心ハ面ノ如ク各異ニシテ

測リ知ル可ラス、而シテ其境遇ノ如キハ之ヲ二人ニ問テ全ク相同シキヲ欲スルモ豈亦得ヘケンヤ、故ニ若シ此ノ心地ト境遇トノ二事ヲ論外ニ抛擲スルニアラスンハ決シテ一個ノ總題ヲモ作り能ハサルヘシ、茲ニ論述スル各個ノ題旨ハ各個ノ情形ニ於テ或ハ未タタノ實景ヲ得スシテ當ラサルモノアルヲ免レサルヘシ、然リト雖モ議論上ノ正理ト實際上ノ利益ニ於テハ敢テ背馳スルモノアラサルナリ、蓋シ此問題ノ主旨ハ若シ「第一」事實ニ庶幾スルト最モ密ニシテ、之ヲステ、他ニ換フヘキモノアラサルカ、「第二



三若シ制法者アリ之ヲ用ヒテ以テソノ治圖ノ基礎ト爲スニ方リ之ヲ他ニ比スレハ其弊ノ更ニ甚キモノタルヲ得ハ以テ充分ト謂ツヘシ

第一ノ境遇 常ニ富財ヲ有セシ時ニ方テ其部分ノ效果ヲ考察スル是レナリ

第一題 富財ノ各部分ハ之ニ相應シタル康福ノ各部分ト聯合ス

第二題 二人アリテ其身代相異ナル時ハソノ大富ヲ有スル者ハ多福ヲ有ス可シ

第三題 極メテ富ム者ハ其康福必スシモ其富

財ノ過大ナルカ如クナラサルヘシ

第四題 前題ノ理ニ據リテ之ヲ論スレハ二者

ノ富財ハ甚タ懸絶シテ相匹敵セスト雖モソノ

康福ノ懸絶セルハ恐ラクハ富財ノ相匹敵セサ

ルカ如キ差異アルニハ至ラサラン

第五題 現實ノ貧富分配法益同等ノ地位ニ庶

幾スルニ從ツテ人民ノ康福ノ總額益大ナルニ

至ルヘシ

爰ニ富財ト稱スル者ハ單ニ貨幣ノミヲ指スニ

アラス其義廣濶ニシテ苟モ生計殷實ノ資ト爲



ル諸物ハ皆ナ其中ニ包括ス○且ツ富財ノ物素  
ノ部分ト説ク可クシテ只富財ノ部分ト稱スル  
モノハ語句ヲ省クナリ

前ニ富財ハ各部分ハ之ニ相應シタル康福ノ部  
分ト聯合スト説キシハ富財ハ各部分ハ之ニ相  
應シタル康福ノ部分ニ聯合スヘキ一定ノ機ヲ  
有スト云フ可キ畧文ナリ

抑モ康福ノ因由ハ其効驗常ニ靈明ナラサルヲ以テ  
預メ之ヲト知ス可ラス、約シテ之ヲ言ヘハ康福ノ原  
因ハ必シモ普通ノ効果ヲ結フヘキモノニアラス、又

各人ニ於テモ此因由ニ就キ必ス此効果ヲ得ヘキニア  
ラズ、夫ノ前文ニ各人ノ性情ト境遇トニ差異アルヲ  
論述セシハ應ニ之ヲ茲ニ援用セサルヲ得サルナリ  
第二題ハ第一題ニ淵源スルモノニシテ、其趣旨ハ二  
人アリ其富相全シカラサルハ大富ヲ有スル者ハ  
多福ヲ享クヘシ、即チ福利ノ機ヲ有スル是ナリ、此題  
旨ハ世間普通ノ經驗ヲ以テ證明シタル實事ナリ、然  
ルニ一派ノ論者アリ財ニ富ム者ハ當ニ其有餘ヲ舉  
テ之ヲ請求スル者ニ分與シ、敢テ誰何ヲ問フ可ラス  
ト爲セリ、此論者ノ見ニ據レハ富者ノ餘財ハソノ價

三編 何氏藏板



ヲ有セサルヲ更ニ土砂ニ異ナルヲナシ却テ之ヲ負  
 荷スルノ苦アリテ其益ナキナリ譬ヘハ沙漠中ノ甘  
 露ハ珍重スヘキ飲液ナリト雖モ之ヲ汲ムト多キニ  
 過キテ需要ニ溢ル、時ハ空シク腐敗ニ歸スルカ如  
 クナラン豈其理アラシヤ、之ニ齊シク若シ富財モ一  
 定ノ額數ニ滿チシ後ハ之ニ因テ更ニ其人ノ福機ヲ  
 増スモノニアラストセハ誰カ一定ノ額數ヲ超エテ  
 希望ヲ起スモノアランヤ、終ニハ蓄積ノ念逡巡シテ  
 一定ノ境界中ニ局促スルニ至ルヘシ  
 第三題ハ詳明ニシテ更ニ喩ヲ其間ニ容ル、者尠カ

ルハシ、今一方ニハ千人ノ力作者アリ、其身代ハ纔カ  
 ニ生計ヲ營ムニ足リテ些少ノ貯蓄アルモノト爲シ、  
 一方ニハ一個ノ君王王家ノ事務ニ拮据セスシアリ  
テ富貴ノ當ヲ得タルモノアリ  
 其富ハ以テ力作者千人ノ富ヲ合セタル者ニ齊シ而  
 シテコノ君王ノ康福ヲ以テ、力作者一個ノ康福ニ比  
 スレハ其大且多キハ固ヨリ論ヲ待スト雖モ、之ヲ千  
 人ノ小福ヲ統合シタル度數ニ比スルニ至リテハ、恐  
 ラクハ之ニ如カサル所アラン、何トナレハ君王ノ康  
 福ノ大ナルハ、力作者一個ノ康福ノ千倍ニハ及ハサ  
 ル可ケレハナリ、若シ能ク君王ノ康福ヲシテ一個ノ

民法論綱 卷之一 三 何氏藏板



康福ノ五倍或ハ十倍ニ至ラシメハ以テ大幸ト謂サ  
 ル可ラス、蓋シ富貴ノ中ニ生長シタル人ハ其境遇ノ  
 價ヲ珍重スルヲ親ラ一家ヲ辛苦經營シテ富有ノ域  
 ニ到リシモノニ如カス、享福ノ至大ナルハ富ヲ有ス  
 ルヲ以テ満足スルノ心情ニ出テスシテ却テ富ヲ得  
 ルヲ以テ快樂トスルノ心情ニ出ルモノナリ、何ソヤ  
 富ヲ得ルヲ以テ快樂トスルノ氣力ハ常ニ進取シテ  
 間歇ナク、如フルニ希望ノ心志ト閱歷シタル苦辛ア  
 リテ絶エス之ヲ淬勵セリ、而シテ夫ノ富ヲ有シテ滿  
 足スルノ心情ハ素ト慣習ニ生シテ曾テ苦辛ノ之ニ

抵抗スルナク、且ツ想像力ヲ費スニ由シ無キヲ以テ  
 其氣力ハ極メテ怯弱ナルモノナレハナリ  
 第二ノ境遇 茲ニ所論ハ富財ノ部分初メテ所得ニ  
 歸スル時ノ效果ヲ考察スル是レナリ、假ニ此所得ノ  
 富財ハ意外ニ出テ、ソノ増殖ハ忽然ノ機ニ成ルモ  
 ノト認定シ以テ論ヲ立ルヲ當然ナリトス  
 第一題 富財ヲ分配シテ己マヤレハソノ部分ハ分  
 配ノ度毎ニ減縮シテ至小ノ額數ト爲リ、終ニ之ヲ有  
 スルノ數人ハ誰モ爲メニ康福ヲ享クルモノ無キニ  
 至ラシ、若シ各人ノ所有ヲ分配シテ極メテ小額ト爲



シ、其價ハ錢厘ノ微ニモ及ハサル時ハ乃チ斯ノ如キ  
 景境ニ歸ス可キナリ、然レ此題旨ノ真正ナルヲ示  
 サンカ爲メニ強テ分配ノミニ從事シテ此景境ニ到  
 テシムルハ決シテ好ム所ニアラサルナリ

第二題 身代相齊シキ數人ノ間ニ富財ノ部分ヲ分  
 配スルニ方テ若シ能ク全等ノ理ヲ存スルト益完全  
 ニシテ之ヲ損スルト益少ケルハ合計ノ康福ハ益大  
 且多カルヘシ

第三題 身代相齊シキ數人ノ間ニ富財ノ部分ヲ分  
 配シ、若シ能ク之ニ由テ全等ノ理ヲ培養スルト益大

ナレハ合計ノ康福ハ益大ナルヘシ

第三ノ境遇 茲ニ所論ハ富財ノ部分將ニ其主人ノ  
 手ヲ去ラントスル時ノ効果ヲ考察スル是レナリ此  
 處ニ於テモ第二ノ境遇ニ於ルカ如ク富財ヲ損失ス  
 ルハ全ク意外ニ出テ曾テ預料セサルモノト假定セ  
 サル可ラス、蓋シソノ所有ヲ保存セントテ希望スル  
 ハ人情ノ然ラシムル處ニシテ之ヲ損失スルハ常ニ  
 意外ニ出ルモノナレハナリ○此希望ノ情ハ事物自  
 然ノ經過路ニ從ツテ發露スルモノニテ汎ク世人ノ  
 情態ヲ察スル片ハ各ソノ己ニ獲ル所ノ物ヲ保存セ



ト欲スルノミナラス、更ニ其數ヲ増殖セントスルヲ看出スヘシ、是レ人運草昧ノ時ノ窮乏ナリシト今日ノ殷富ナルトノ差異ハ即チ其確証トリ  
第一題 富財ノ部分ヲ損失スルハ其所失ト所剩ノ部分ノ多寡ニ應シテ、各人ノ康福ヲ損失スルニ大小ノ差アルヘシ

試ニ某者、所有ノ四分ノ一ヲ取り去ランニ即チ其康福ノ四分ノ一ヲ取り去ルニ異ラサル可シ、其他皆ナ然リ  
茲ニ賭博ノ害ヲ援用スヘシ、ソノ富財ニ係ルノ機ハ賭博ニ於ルモ更ニ異ナル所ナシト雖モ、ソノ康福ニ係ルノ機ニ至リテハ決シテ益アルモ、ソノアラス、譬ヘハ我レ今一千金ノ所有アリ其半數五百

金ヲ以テ賭額ト爲シ、若シ中ラステ之ヲ輸センニハ我カ富ノ一半ヲ減セン、而メ若シ之ニ勝ツモ、ソノ所増ハ常ニ三分ノ一ニ過キサラン、又孤注ノ計ニ出テ我カ所有ノ一千金ヲ竭シテ之ヲ賭額ト爲シ、若シ僥倖ニシテ之ニ勝タハ我カ富財ハ二倍スヘシト雖モ我カ康福ハ必スシモ二倍ニ至リ難ク、若シ之ニ輸セハ直ニ赤貧ノ景況ニ陥然ルニ又此例ヲ以テ推量ス可ラサル景況アリ、譬ヘハ我カ身代ノ四分ノ三ヲ削ルニ於テハ纔カニ我カ肉體上ノ需要<sub>衣食</sub>ヲ供給スルニ足リテ餘裕ナキニ至ランノミ、然ルヲ又ソノ所剩ノ一半ヲ減殺スルニ至ラハ、我カ康福ヲ損失スルハ極メテ重大ニシテ、先キノ四分ノ三ヲ削ラルニ比スレハ倍蓰ニシテ尚ホ止ラサルヘシ



第二題 一定ノ損失ヲ分配スルニ方テ之ヲ蒙ル所ノ諸人ノ身代全等ニシテ、而モソノ人数衆多ナルハ、之カ爲メニ總計ノ康福ヲ損スルノ度数ハ極メテ些少ナルヘシ

第三題 既ニ一定ノ地位ニ達シ而ノ尚ホ分配シテ止マサル時ハ、其損分ハ極メテ細微ニシテ各人殆ト之ヲ感覺セサルニ到ルヘシ

第四題 身代同シカラサル諸人ニテ富財ヲ損失スルニ因テソノ康福ヲ損失スルアルニ若シソノ分配ノ方法ヲ以テ却テ全等ノ地位ニ接近スルヲ得ハ

ソノ損失スル所ノ康福ハ從ツテ輕少ナルヘシ但シ之ニ依テ安固ヲ破毀スルノ害ハ之ヲ茲ニ論セス

世運開明ニ趨クニ從ツテ政府ノ治術ハ大ニ損失ヲ均分スルノ理ヲ培養スルヲ歸向シ、勢メテ保任會社ノ設立ヲ勸奨セルモノノ趣意ハ茲ニ在リ、故ニ斯ノ如キ有目的ノ契約ヲ爲スハ、各人ヲシテ未來ノ損失ヲ防備セシメシカ爲メニ預シメ一定ノ豫金ヲ爲サシム、又保任ノ大綱トスル處ハ專ラ未來偶然ノ事變ヲ預慮スルニ在リテ、其要若シ損失アレハ之ヲ衆多ノ人数ニ分配シ、其責任極メテ輕少ニシテ殆ト之



ヲ感覺セシメサルニ歸スルニ外ナラス  
有國ノ君主其臣民ノ天災ニ罹リ或ハ兵亂ヲ蒙ムリ  
テ疾苦スルモノアリテ之ヲ賑恤スルニ一國ノ公帑  
ヲ費用スルモ其趣意全ク之ニ同シク而ノ其趣意ノ  
懿美ニシテ治國ノ深遠ナルハ獨リ字國フレアリキ  
大王ヲ以テ第一等ト爲ス今日コノ經世ノ治術ヲ施  
行スルニ方テハ須ラク孝王ヲ以テ矜式トセサル可  
ラス  
罪ヲ犯シテ他人ニ損失ヲ與フルハ犯者ニ辨償ヲ  
爲サシムヘキ方法ヲ試行セシ類例之ナキニアラス

唯々之ヲ援テ準則トスヘキモノハ甚々稀レナリ若  
シ此法果シテ能ク行ハルハキハ人ノ資産ヲ侵スノ  
罪ハ自ラ減少シテ殆ト其害ヲ一掃スヘキニ依リ制  
法者ハ宜シク其目的ヲ茲ニ期セサル可ラス然レド  
此法ヲ制スルニハ須ラク深思熟慮シテ之ヲ調整シ  
務メテ其弊ナカラシムルヲ要ス蓋シ此法一タヒ定  
マレバハ損害ヲ受クルモ必ス其辨償ヲ得ヘキリ故  
ニ所有主タル者自ラ怠慢ニ流レテ犯罪者ヲ防禦ス  
ルヲ懈ルノ弊アリ是亦戒慎セサル可ラサレハナリ  
故ニ此辨償法ノ世人ノ實利トナルト否ラサルトハ



全ノ治術ノ巧拙ニ歸スルノミ、然レモ己ニ其害アルヲ見レモ之ヲ遏絶スルノ勞苦ヲ厭惡シ、遂ニ善政美法ヲ採用セサルカ如キハ、民福ヲ慮ルノ情甚々疎薄ナルモノニシテ其咎免レ難キナリ

上文ニ掲ケシ道理ハ、之ヲ數人ニシテ齊シク責任ヲ共負スルモノニ損失ヲ分配スルノ準規ト爲ス可シ、若シ其共出セル釀金ハ各人身代ノ厚薄ニ相應スルモノナル時ハ、彼此ノ境遇ハ正ニ前ニ論セシモノ、如クナル可シト雖モ、若シ此機ニ乘シテ彼此ノ身代ヲシテカメテ同等ノ地位ニ到ラシメシムル欲セハ必

ス他ノ賦課法ヲ用ヒサル可ラス、又身代ノ厚薄ニ拘ハルヲ無ク彼此同一ノ賦課法ヲ用フルカ如キハ、第一法ニ屬シテ同等ノ理ト安固ノ道ニ於テ俱ニ背馳スルモノナリ

此題旨ヲシテ一層明白ナラシメンカ爲メ更ニ一個ノ斷案ヲ出スヘシ、即チ茲ニ甲乙ノ二人アリ甲ハ乙ニ損シテ以テ己レヲ利セン事ヲ求ムヘシ、於是乎富財ノ一部ノ効果ハ乃チ利ノ形ト爲リテ甲ノ手ニ歸スルニハ、必ス損ノ形ト爲リテ乙ノ手ヲ去ルモノト言ハサルヲ得サル是レナリ



第一題 身代相同シキ争利者ノ中ニテ、若シ甲ノ所得ハ即チ乙ノ所損ニ外ナラサルトキ、其富財ヲ分配シテ康福ノ全額ヲ減セサラント欲スルニハ、ソノ損セントスルモノヲ惠ミテソノ得ントスルモノヲ抑ユルノ方法ニ在ルノミ、其故如何

第一 所損ノ額數ハソノ増ス所ノ身代ニ於ルヨリモ減スル所ノ身代ニ於テ其利害更ニ著シク、即チ乙ノ所損ノ康福ノ減スルハ甲ノ所得ノ康福ノ増スヨリモ更ニ著シケンハナ

リ○一言以テ之ヲ約スルニ同等ノ理ハ及對ノ分配法富者ニ増シテ貧者ニ減スニ由テ破ル、モノナ

第二 損者ハ不意ニ損失ノ憂苦ニ陥ルト雖モ得者ニ於テハ單ニ物ヲ得サルノ景況ニ在ルニ過キササル而已、殊ニ得サルモノヲ得サルハ虚苦ニシテ而ノ失フヘカラサルヲ失フハ實苦ナリ、其間自ラ逕庭ノ差アルハ固ヨリ言ヲ待タス、若シ此情況ヲ以テ其理アラスト爲シ、各人ソノ得サル所ノ各事各物ニ就テ憂苦



ノ生センニハ、憂苦ノ因ハ源々トシテ絶エス、  
各人一時モ樂意アルノ期ナカルヘシ

第三 人類ハ之ヲ概スルニ全一ノ事故ニ於  
テハソノ樂ヲ喜フノ情ヨリモ苦ヲ憂フルノ  
情太甚シキモノトス、之ヲ喻フルニ若シ一人  
其身代ノ四分ノ一ヲ損スルコトアレハ則チソ  
ノ康福ヲ減スルノ度数ハ、其身代ヲ一倍シテ  
所増ノ康福ノ度数ヨリモ恐クハ更ニ著大ナ  
ル可ケレハナリ 苦ノ積ハ樂ノ積ヨリ大ナル  
ト謂フニハアラズ、苦ハソノ  
起ルコト稀ナルノミナラス、殊ニ偶然ニ出ルモ  
ノ居多ニシテ、樂ノ如ク一定不易ノ因由ニ匪

此ニ及、且ツ一定ノ點ニ到ル迄ハ吾人ノ力能  
ク苦ヲ避クテ樂ニ就クヲ得ヘシ、又人性ハ康  
福ヲ信スルノ情原クシテ常ニ之ヲ失フノ憂  
ニ充スルモノナリ、白鴿野ノ盛シニ流行シテ  
息マサルヲ以テ  
之ヲ証スヘシ

第二題 身代相同シカラサル者ノ中ニテ若シ  
最貧ナルモノ損者タル時ハ、ソノ所損ノ苦ハソ  
ノ貧富ノ同シカラサルニ應シテ最モ相増スヘ  
キナリ  
第三題 若シ最富ナルモノ損者タル時ハ、ソノ  
安固ヲ破ラレテ受ル所ノ苦ハ貧者ニ異ナラス  
ト雖モ、之ニ依テ全等ノ身代ニ赴ク處ノ福利ヲ



以テ、稍々其苦ノ一部ヲ償フニ足ルヘシ  
前ニ陳述セシ諸則ハ其狀頗ル數學ノ問題ニ類似シ  
テ而モ變動ナキモノナリ故ニ若シ之ニ依頼スル  
他日終ニ辨償満足ノ通規定則ヲ制定スルニ至ルコ  
ト期シテ待ツハキナリ然ルニ制法者ハ往々イタ井  
チ一憲公平ノ義ニシテ、法律ノ缺典ノ補  
フニキ為メ設クタル一種ノ裁判法ノ名目ヲ藉  
リテ貧富全等ノ治術ヲ用フルノ氣色アリ之ニ由テ  
公義ノ道法律ニ依頼スルヨリモイタ井チ一ニ依頼スル  
モノ居多ナリ抑モイタ井チ一ハ限界渺茫トシテ理會  
シ易ラス全ク一時ノ情實ニ依テ作用ヲ爲シ固ヨリ

法律ノ規矩章程整然タルノ比ニアラサルナリ今日  
錯亂シタル意見ノ人心ニ浸染スルハ啻ニ百千ノミ  
ナラス之ヲ綢繆シテ嚴格ナル問題ト爲スニハ幾多  
ノ忍耐力ヲ費シ幾多ノ秩序ヲ經テ漸ク茲ニ達ス可  
キナリ

第七回 安固ノ事ヲ論ス

此一回ハ法律ノ要目タル安固ヲ保全スルノ一事ヲ  
論述スヘシ抑モ安固ナル者ハ全ク法律ノ作用ニ出  
タル無量ノ福利ニシテ文化開明ノ瑞相ナリ法律  
ヲサレハ安固ノ事ナシ安固ナケレハ殷富ノ術無キ



ノミナラス殆ト生計ノ道ヲモ杜塞スルヲ免レズ斯  
ノ如キ景況ニ在テハ人民全等ノ分限アリト雖モ彼  
我齊シク苦難ニ罹ルニ於テ全等タルニ過キス  
コノ法律ノ大徳ヲ測テ其真景ヲ得ント欲セハ先ツ  
野蠻未開ノ景況ヲ回顧スヘシ野蠻ノ人民ハ常ニ饑  
饉ト相責メテ一日モ休息スルヲ得ス否セサレハ一  
部落ノ人種之ヲ爲メニ鋤除セラレ旬日ヲ出スシテ  
子遺ナカルヘキヲ以テ唯生計ノ道ニ汲々トシテ彼  
我相遜ラス其極ハ一場ノ戰爭ト爲リ人ヲ殺シテソ  
ノ肉ヲ食フニ至ル其兇惡ノ狀ハ恰モ猛獸ノ野ニ闘

ツテ互ニ啾噬搏攫ヲ逞クスルニ異ラス是ヲ以テ善  
良ノ天性アリト雖モ苦患ヲ恐ルカ爲メニ之ヲ操  
持スルヲ能ハス惻隱ノ心ハ時トシテ發生セサルニ  
アラサレモ食ヲ求メテ得サルカ爲メニ亦タ老衰ノ  
者ヲ殺スモ其非義ヲ悟ラサルナリ  
又社會文明ノ氣運却步シテ將ニ古昔野蠻ノ景況ニ  
復セントスル時期(即チ軍旅ノ事アリテ安固ノ法律  
ノ一部ヲ停止スル時)ノ情實ヲ考察ス可シ干戈未タ  
輯マラサル間ハ一割トシテ禍實ヲ結フノ秋ニアラ  
サルハ無クソノ一舉一動到ル處皆チ殷實生計ノ源



タル現貯ノ富財ヲ減削殄滅スルニ非サルハ無シ、下  
ハ衡門草廬ヨリ上ハ石室巨厦ニ至ルマテ齊シク奪  
掠ノ慘毒ニ罹リ、甚シキハ數歳ノ辛勞ヲ經テ成立セ  
シ處ノ事物ト雖モ、只一時ノ憤怒ヲ以テ之ヲ破毀セ  
シコト往々之ンアリ

性情ノ自然ニ任セシキハ決シテ成シ得サルノ事業  
ヲ成スモノハ唯法律ノミ然リトス、物件ニ資産ノ名  
ヲ下シテ一定不易ノ所有權ヲ製造スルモノモ亦唯  
法律ノミ然リトス、又人ヲシテ預慮ノ羈絆ニ屈從セ  
シメテ始メハ疾苦ノ思アルモ能ク忍耐シテ後遂ニ

悦服ノ効ヲ奏スルハ法律ノ力ナリ、又人ヲ勸メテ今  
日、有餘ノ勞作ニ勤メシメ以テ未來ノ福資ヲ播カシ  
ムルモ法律ノ力ナリ○經濟節儉ノ道ニハ浪費ナル  
勁敵アリ、人ヲシテ物ヲ生スルニ勞セシメスシテ唯  
物ヲ享ケシメンコトヲ欲ス、勞作ハ惰夫ノ爲メニハ大  
ナル痛苦ナリ、忍耐カニ乏シキモノ、爲メニハ甚ク  
迂遠ナリ、陰ニハ狡猾不義ノ二者アリ、騙局ヲ設ケテ  
勞作ノ果實ヲ偷マンコトヲ謀リ、陽ニハ破廉耻、暴恣ノ  
ニ苦アリ、策畧ヲ運ラシテ之ヲ強奪センコトヲ欲ス○  
是故ニ安固ノ一事ハ絶エス、恐喝、欺騙ノ患難ニ追ハ



レ恰モ惴々トシテ陷阱ノ機中ニ生息シ一刻モ安逸  
 ナラサルモノ、如シ然レハ明察以テ衆敵ノ陰謀ヲ  
 折キ、威權以テ其變亂ヲ防クヘキ治圖アルハ深ク之  
 ヲ制法者ニ希望スル所ナリ  
 法律ハ人ニ告ケテ勞作セヨ我レ汝ヲ賞セント言フ  
 ニアラス、唯勞作セヨト告ケ而メ人ノ物ヲ奪フヘキ  
 敵手ヲ抑壓シテ我レ汝ニ汝ノ勞作ノ果實ヲ享用  
 セシメント告ケタリ、約シテ之ヲ言ヘハ我レハ汝ニ  
 我レ汝ノ勞作ヲ保シ能ハサル所ノ天然ノ褒賞  
 ヲ保管セシメント謂フ是レナリ、夫レ物ヲ生スルハ工業

ノカナリ其之ヲ保護スルハ法律ノ作用ナリ、若シ吾  
 人各物ニ就テ勞作ヲ以テ首功ト爲ス片ノ之ニ次ノ  
 處ノ事物ハ全ク法律ノ範圍ニ歸シテ第二功ニ列ス  
 ヘキナリ  
 安固ノ大綱ニ屬スヘキ局面ノ全體ヲ明知セント欲  
 スルニハ、須ラク先ツ人ハ禽獸ニ異ナル所アレハ徒  
 ニ現時ノ苦樂ニ僥促ス可キニアラス必ス未來ノ苦  
 樂ヲ豫慮スヘシ、又現時ノ損失ヲ防備スルノミトラ  
 マカメテ將來ノ損失ヲモ保護スヘキモノタルヲ認  
 定シ、而シテノ安固ヲ謀慮スル心意ハ人ノ想像力ノ



測り得へキ局面ノ幅員ニ應シテ益開擴スヘキナリ  
前途ヲ謀ルノ心意ハ人ノ境遇ヲ感動スル効用甚々  
著シキモノニテ之ヲ稱シテ未來ノ希望心ト云フ此  
希望心アルニ依テ各人行爲ノ準規ヲ立テ此希望心  
アルニ依テ各人生存中乍チ起リ乍チ滅スル處ノ間  
段ハ前後照應シテ斷ルコトナク終ニ全線ノ一部ト爲  
ルナリ希望心ハ各人ヲシテ現今將來ノ生活ヲ繫カ  
シムル處ノ鎖鍵ニシテ終ニハ各人ノ壽期ヲ超エテ  
後世子孫ニ推及スヘク各人ノ知覺、此鎖鍵ノ脈絡  
ニ伴フテ皆ナ全一ノ長度ニ達スヘシ

安固ノ大綱ハ都テ此等ノ希望心ヲ統括セリ此希望  
心ノ法律ニ依頼スル處ノ事實ハ須ラク法律ヲ以テ  
造爲シタル希望心ヲ吻合シテニツナカラ相悖ラサ  
ルヲ切要ナリトス  
此希望心ヲ損傷スル處ノ事物ハ著明ノ弊害ナルヲ  
以テ之ヲ稱シテ希望ヲ失スル意外ノ痛苦ト謂フ  
然リ而シテ今日ニ至ルマテ法律學者ニシテ人生ノ  
大要タル此一點ニ着目シ以テ其綱目ヲ分拆セルモ  
ノ無シ甚タシキハ語録中ニ希望ノ字ヲ出ケス著作  
中ニ之ヲ討論スルヲ見ス實ニ疎漏ナリト謂ハサル



ヲ得ンヤ、固ヨリ二三ノ學者アリテ之ニ論シ到リシ  
 一アルハ衆ノ能ク知ル所ナリト雖モ、之ヲ論セシハ  
 適マ一時ノ性情ニ發シタルノミニテ未タ道理上ヨ  
 リ出テシモノアラサルナリ

若シ學者輩能ク此希望心ノ甚々緊要ナルヲ會得シ  
 タランニハ、之ヲ畧シテ論セサルノ理アラサル可シ、  
 且ツ一タヒ之ヲ論セハ必スソノ要領ヲ啓示セス  
 ハアラサルヘキナリ

第八回 資産ヲ論ス

吾人若シ法律ノ利益アルヲ測リテ遺ス所ナカラ

ント欲セハ先ツ資産ノ意義ヲ繹子テ胸中ニ了々々  
 ラシムヘシ、抑モ資産ハ全ク法律ノ製作ニ出ルモノ  
 ニシテ固ヨリ天造ノモノニ非サルヲ知ルヘキナリ  
 夫レ資産トハ希望心ノ由テ起ル源頭ニシテ、即チ之  
 ヲ所有スル人ト所有セラル、物トノ間ニ存スル所  
 ノ關涉ニシテ、所有主ナルモノハ此關涉ニ依テ利益  
 ヲ得ント欲スルノ希望心ニ過キサルノミ  
 資産ノ元素タル所ノ關涉ハ原來、形ナク色ナク又痕  
 跡ノ見ルヘキ無ク言辭ノ之ヲ形容スヘキ無シ、資産  
 ハ純乎タル心造ノモノナルヲ以テ唯、物ノ理ニ屬ス



ルノミニテ物ノ體ニ屬セス  
一物ヲ手ニ執リ之ヲ持チ之ヲ製シ之ヲ鬻キ其質ヲ  
變シテ之ヲ用フル等ハ皆ナ形體上ノ事ニ屬シテ未  
タ以テ資産ノ意ヲ表スルニ足ラス、現ニ渺茫萬里ノ  
外ナル印度ニ在ル一匹ノ布ト雖モ我カ所有ニ屬ス  
ルモノアリ或ハ現ニ我カ肌膚ニ着スル處ノ衣衫ニ  
シテ他人ノ所有ニ屬スルモノ果シテ之レ無キニア  
ラス、又己ニ我カ口腹ニ入リテ我カ血肉ト化セル食  
物モ未タ全ク我カ所有ト爲ラス他人ニ辨償スヘキ  
モノアリ

資産ノ意義トハ其人ノ景況ノ如何ニ從テ目的トス  
ル處ノ物件ヨリ一定ノ利益ヲ生セント欲スル信任  
力即チ一定シタル希望心ニ成ルモノナリ  
然レ此ノ信任力此希望心ハ法律ノ作用ニ非サレ  
ハ之ヲ發生セシムルヲ得ス、何トナレハ我レ一物ヲ  
有シ而シテ之ニ由テ其福利ヲ享クル所以ハ他ナシ、  
唯法律ノ之ヲ我カ所有ナリト保證スルモノアルニ  
依頼スルノミ、又人ヲシテ己カ天然ノ弱キヲ忘レテ  
敢テ強暴ヲ恐レサラシムルハ將タ何ノ作用ニ依テ  
然ルヤ、唯法律ノ庇蔭ニ安息シテ然ルモノナリ、又茲

民法論綱 卷之三 第三十一節 財產

民法論綱 卷之三 第三十一節 財產



ニ一頃ノ田アリ範籬ヲ設ケテ之ヲ耕シ而ノ未來ノ秋獲ヲ期望スルヲ得ルモ全ク法律ノ保護ニ頼ルヘキアルヲ以テナリ

或人問テ曰ク一定ノ物品ニ資産ノ名ヲ下シ之ヲ保護セント約定シ而ノ法律ヲ運爲スルニ方テ、將夕何物ヲ以テソノ元素ト認ム可キヤ、答テ曰ク天造草昧ノ世ニシテ未夕法律ヲ制定セサル時ニ方テモ、人類ハ己ニ法律未有ノ先ニ於テ一定ノ物品ヲ享用スヘキ天然ノ希望心ヲ有セシニアラサルハ無シ夫レ然リ、人類ハソノ受造ノ初ノヨリ己ニ此希望心

アルモノニテ各自ニ方策ヲ設ケテ以テ一定ノ物品ヲ享用シ、且以テ之ヲ保存シテ安固ナラシムル情態アリ、唯夕天造草昧ノ時ノ情態ハソノ區域極メテ狹隘ニシテ今日ノ如キ廣大ニ至ラサルノミ、野蠻ノ民ノ擄物ヲ得ルヤ深ク之ヲ隱藏シ、而メソノ巢窟未夕他人ニ發覺セラレズ、其身未夕睡眠ニ就カス、其力能ク敵ニ勝ツヘキ間ハ之ヲ保存スルノ希望心アリ、野蠻ノ希望心ハ特リ此ノ三事ニ止リテ其他ニ推シ到ラス、故ニ一物ヲ所有スルニソノ艱苦不穩ナルヲ斯ノ如シ、若シ此蠻民ノ中ニテ粗契約ノ如キモノヲ結ン



テ彼此互ニソノ擄物ヲ侵掠ス可ラスト約束スル  
アラハ乃チ資産ノ意義ヲ生スル端緒、茲ニ發生シテ  
此約束ニ法律ノ名ヲ下サ、ルヲ得サルニ至ラン、且  
ツ純乎タル形體上ノ事情ヨリシテ時ニ希望心ヲ發  
作スルヲアリト雖モ全ク一時經行ノモノニシテ堅  
忍不撓ノ希望心ニアラサルナリ、堅忍不撓ノ希望心  
ニ至テハ法律ニ依頼セサレハ決シテ發作興起スル  
ヲ能ハス、之ヲ喻フルニ性法上ノ境遇ニ於テ所起ノ  
希望心ハ僅ニ一綫ノ微ニ過キサルモ、社會ヲ集成ス  
ルニ及ンテバ竟ニ巨大ノ繩索ト爲ルカ如シ

是故ニ資産ト法律トハ同時ニ生シテ同時ニ死スル  
モノナリ、法律未制ノ前ニハ資産アルヲ無シ、法律ヲ  
廢絶スル後ハ資産乃チ滅亡ス  
資産上ノ安固ハ、福利ノ幾分ヲ享用セント欲スルニ  
由リ法律ニ依頼シテ所生ノ希望心ヲ擾亂變動セサ  
ルニ在リ、制法者ハ須ラク其作興セシムル所ノ希望  
心ヲ看護セサル可ラス、此心ヲ擾亂セサルキハ則チ  
以テ社會康福ノ元氣ヲ增益シ、之ヲ損傷スレハ從ツ  
テソノ憂苦ヲ生スヘキナリ

第九回 資産ノ法律ヲ駁スルモノニ答フ



敢テ問フ、資産ノ法律タル之ヲ所有スルモノ、爲メニハ或ハ福利ト爲ルヘシト雖モ、之ヲ所有セサル者ノ爲メニハ苛虐ト爲リ、從ツテ貧者ノ苦難ハ此ノ法律アルカ爲メニ却テ太甚シキヲ致スニアラスヤ。答テ曰ク法律ハ資産ヲ造爲スル時ニ方テ併セテ富財ヲモ造爲シタリ、然レモ貧窮ニ至テハ人類受造ノ初ノ分限ニシテ決シテ法律ノ作用ニ出テシモノニ非ラス、即チ今日ノ生計アリテ來日ヲ保タサルハ宛然タル天造草昧ノ境遇ナリ、社會ノ最モ貧窮ナル野蠻ノ人民ハ苦痛スヘキ勞作ニ依ラスシテハ一物モ

得ヘカラス、是レ性法上ノ境遇ヲ脱セサル以上ハ力作ノ價ニアラサレハ一物ヲモ購フ可キモノナキヲ以テナリ、射獵ハ山野ヲ跋涉シ、漁業ハ不測ノ淵ニ臨ミ、争鬪ハ預メ勝敗ヲ期シ難キカ如キ即チ是ナリ。○人類ハ果シテ斯ノ如キ危険ナル生活ヲ好ムモノト爲スカ果シテ艱難ヲ恐レサルノ天性アリトスルヤ、野蠻ノ民ハ果シテ斯ク性命ヲ餌ニシテ買得タル散漫自由ヲ悦フモノトスルヤ、則チ其所謂康福ハ我カ今日ノ勞作者ノ康福ニ勝ルモノト断定ス可キヤ、決シテ然ラス、今日我カ勞作者ノ職工ハ一定シテ斷工



ス其賞ハ一定シテ差ハス、女子ノ命運ハ漸ク進テ其  
 柔婉ノ徳ヲ守ルヲ得、老幼ハ衣食ヲ仰ク所アリテ  
 飢寒ニ陥ラサルヲ得、其他、康福ヲ増加スルノ事百般  
 ニシテ竭キス、此等ノ數事ヲ以テ之ヲ論スルモ榮枯  
 貧富ノ別ハ判然トシテ其境界アルヲ見ルヘキナリ  
 ○是故ニ資産ヲ造為スル處ノ法律ハ性法上、貧窮ノ  
 境遇ニ止マルモノ、為メニ大恩ヲ施セリト謂フモ  
 可ナリ、唯此ノ法律アルニ依テ人民ハ文明社會ノ快  
 樂、福利及ヒ富貴ノ多少ヲ享有シ、其分限ヲ擴開セシ  
 ト欲シテ政々トシテ職業ニ勉勵シ、希望心ヲ以テテ

ノ勞作ヲ鼓舞シ從テ事ヲ成シ物ヲ得ルノ樂趣ヲ致  
 スナリ、然ルヲ法律ノ人ニ與フル處ノ安固ハ其關係  
 重大トナスト為スモノ、豈其理アラシヤ、○抑、上等ノ  
 地ニ居テ俯シテ下ニ在ル者ノ分限ヲ察スレハ事々  
 物々實ニ已レニ如カサルヲ省破スヘシト雖モ、下ニ  
 居ルモノ、境遇ハ仰テ在上ノ人ヲ視ルモ雲煙萬重  
 ニシテソノ物色ヲ得難シ、在下ノ人ハ在上ノ人ト其  
 境遇ノ差ヲ比較シ能ハサルノミナラス、夢寐ノ間ニ  
 於テモ尚ホ之ヲ希望スルヲ能ハス、然レトモ嘗テ其  
 間ニ為シ能ハサルノ事情アルニ由テ然ルニアラス



故ニ法律ハカメテ閭閻ノ康福ヲ保護スルニ深厚ニ  
シテ、其安固ヲ得セシムルハ猶ホ大厦巨室ニ於ルト  
同一ナラサルヘカラス○ヘカリヤノ如キ具眼ノ學  
士ニシテ、哲理學ノ金科玉條トモ稱スヘキ著書中ニ  
人間交際ノ秩序ヲ顛覆スヘキ問題ヲ掲載セルハ、實  
ニ怪哉ノ嘆ヲ生セサルヲ得ス、其論ニ云ク、資産ノ權  
利ハ權利ノ恐ルヘキモノナリ、或ハ之アルヲ必要ト  
セサルヘシト、蓋シ苛虐殘忍ノ法律モ此ノ權利ニ淵  
源シテ制定セシト無キニアラス、又此權利ヲ濫用シ  
テ恐ルヘキ弊害ヲ生セシト無キニアラス、然レモ此

權利ノ本體ハ帝ニ快樂、殷實、安固ノ意ヲ含有シテ決  
シテ惡性ノモノニアラス、夫ノ逸ヲ好ミ、勞ヲ厭フノ  
人情ニ闘ヒ克ツモノハ必竟此權利ノ外ニアラス、又  
人ヲシテ能ク地球ヲ支配シテソノ主宰タラシムル  
モ此權利ノ外ニアラス、又一部落ノ民ヲシテ水草ヲ  
逐フテ遷移スルノ夷俗ヲ放棄セシメシモ此權利ノ  
外ニアラス、其國ニ居テハ其國ヲ愛シ以テ後世ノ計  
ヲ慮ラシムルモ此權利ノ外ニアラス○速ニ福利ヲ  
享受シテ其罰ナキヲ欲スルハ人ノ常情ニシテ、宇内  
ヲ通シテ然ラサルハナク、已レハ物ヲ有セスシテカ



ノ物ヲ有スル他人ニ對シテ欲得ノ念ヲ發シテ其氣  
焰甚タ旺盛ナルモ能ク此氣焰ヲ束縛スルハ法律ノ  
作用ニシテ兇害ヲ逞タスルニ至ラシメス、其功亦偉  
ナラズヤ

民法論綱卷之一終

1  
6  
46



